

新刊紹介

ゆきんこのたび

—ゆきにかかれたおはなし—

鈴木啓助作 さくらい史門絵
オフィスエム

2012年11月21日発行, A5判 32頁, 1,260円
ISBN-13: 978-4904570654



「ふゆになると そらからふってくる しろいもの。それは ゆきんこ」

とてもチャームな一文が込められている本書は、オフィスエムから発行されている科学絵本シリーズの第2弾である。空から降ってくる雪“ゆきんこ”を主人公にした物語で、雪と人の関わりを中心に非常にわかりやすい絵と文章で綴られている。対象は幼児から大人まで幅広く楽しむことができるものと思う。

子どもたちが身近に触れる雪遊びを滑り出しに、「でも どうして そらからふってくるのだろうか？」と疑問を投げかけている。もし子どもに質問されたらどのように答えたら良いのだろうか、躊躇する人も少なくないだろう。この疑問から、読者を雪の世界に誘うように本書は始まる。

雪結晶のかたちが多様であることは周知のことと思う。しかし、雪は丸いかたちをして降ってくると思っている子どもたちがほとんどではないだろうか。これについて本書では「ゆきんこの分身術」と表現し、雪の結晶を「ロックさん、カクバンさん…」と可愛らしい絵とともに表現することで小さな雪粒たちは、実はおもしろいかたちをしている、といった発見につながるのではないだろうか。また、本書の巻末には中谷宇吉郎の『雪の結晶の分類表』が記載されており、子どもの成長とともに、結晶のかたちが違う理由、「ゆきにかかれたおはなし」の本書タイトルの意味が理解されることと望まれる。

近年、大気汚染が深刻になる中、大気中のチリ

や埃（エアロゾル）を付着させながら降雪する雪について着目することも重要なテーマと言える。教育の観点から、本書は子どもたちに「ゆきんこは そらのおそうじやさんなんだ！」と投げかけている。また、「ゆきんこがたくさんふったあとに おひさまがでてくると くうきが きれいになっていませんか？」といった問いから、雪だけに限らず、空（大気）など身の回りの環境への興味が波生することも期待できる。

さて、雪はどのような過程を経て地上に降るのだろうか。この疑問についても、子どもに上手に説明できるだろうか。少し難しい雪雲の生成過程から、降雪および積雪についても触れられている。これから読む読者の妨げになるので詳細は省くが、まさに雪氷研究のエッセンスが散りばめられている。雪氷物理化学を基にすれば実に奥深い内容であることが即座に理解できる。それを簡潔かつ丁寧に子ども向けに解りやすく紹介している本書に驚きを隠さずにはいられない。また、雪が人々に与える恵みを紹介し、「ざらめゆきがみられるようになれば はるはすぐそこ！」とあるように、可愛らしい絵と併せて雪を通した季節も如実に表現されている。

このように本書は、奥深い雪氷研究を垣間見ながら、『温かい雪の世界』を学ぶ楽しさを教えてくれる。

(名古屋大学大学院 保科 優)
(2013年10月8日受付)